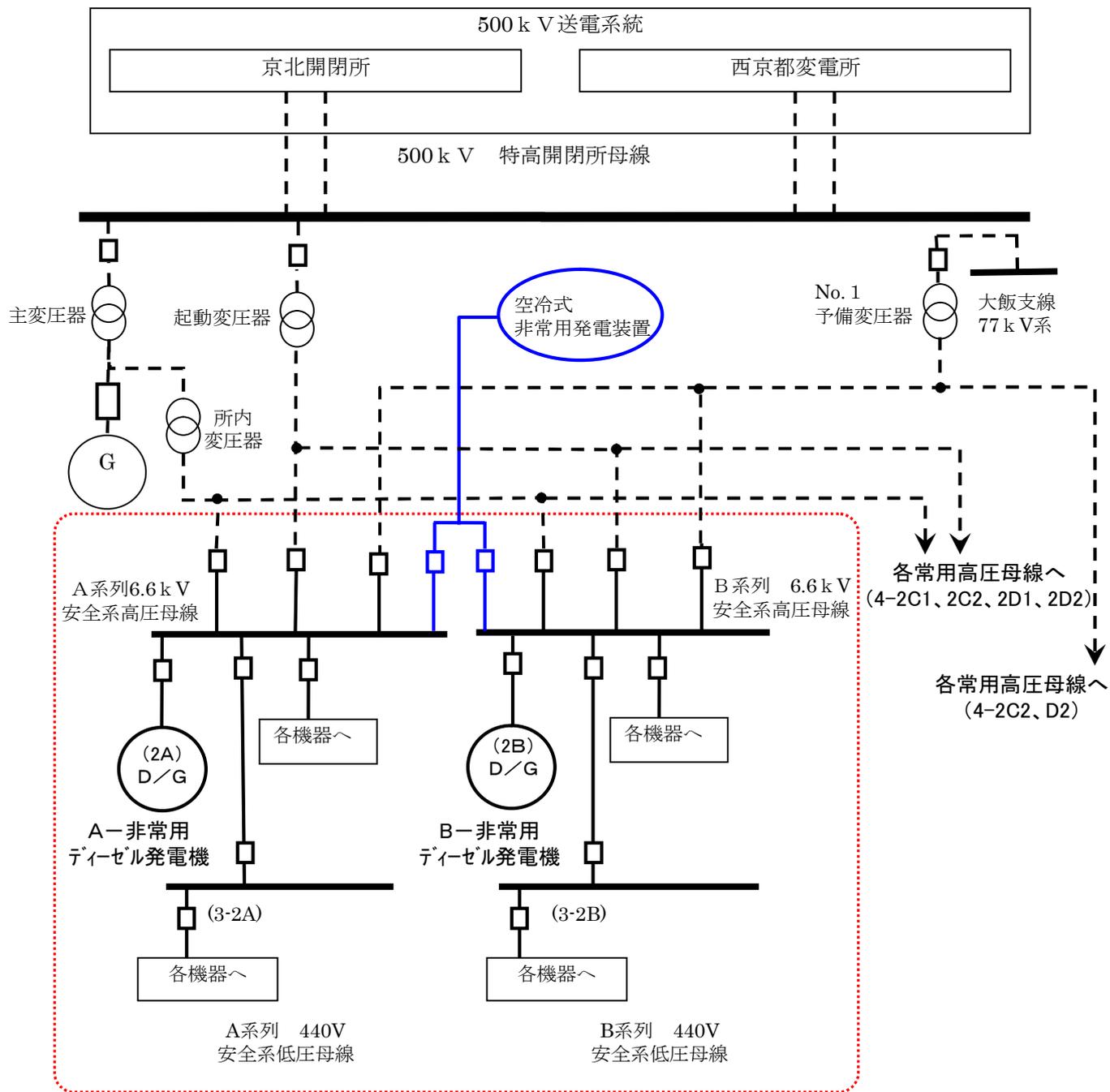
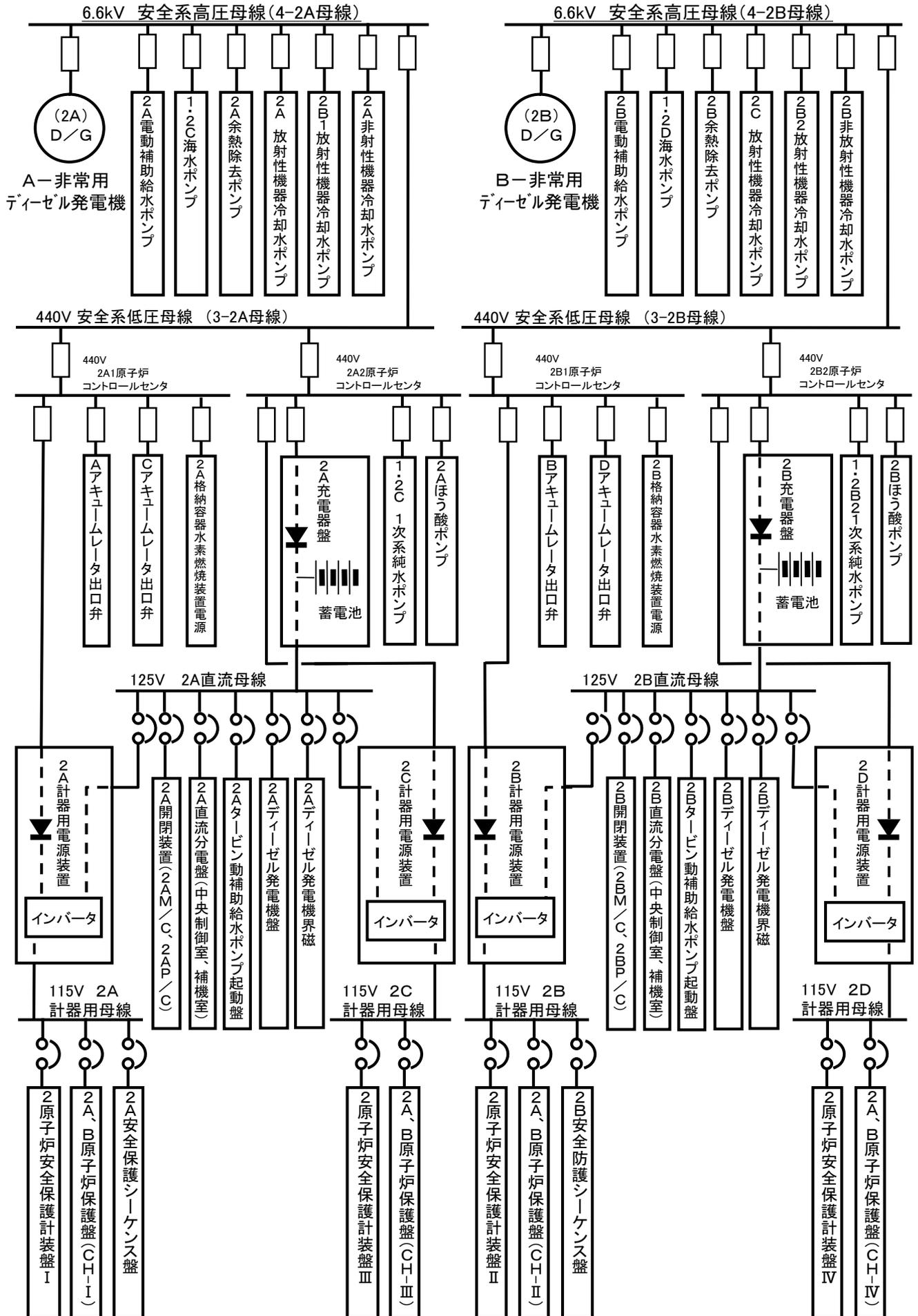


電源構成概要図 (1/2)





### 非常用ディーゼル発電機の継続運転時間

【外部電源喪失時の原子炉冷却方法】



【冷却時の必要負荷】

事象収束に必要な 主要機器	i) 「冷温停止に移行」						ii) 「冷却維持」	
	外部電源喪失事象発生 不要機器停止・追加機器起動 (1時間)		不要機器停止・追加機器起動 余熱除去系インサービス (9時間)		RHRPインサービス 冷温停止到達 (10時間)		Aトレン	Bトレン
充てん/高圧注入ポンプ	560	560	0	560	0	560	0	560
下部コンバートメント再循環ファン	360	360	0	360	0	360	0	360
放射性機器冷却水ポンプ	300	300	300	300	600	300	300	300
海水ポンプ	850	0	850	0	850	0	850	0
電動補助給水ポンプ	500	500	0	0	0	0	0	0
非放射性機器冷却水ポンプ	400	400	0	400	0	400	0	400
チラーユニット	515	0	515	0	515	0	515	0
余熱除去ポンプ	0	0	0	0	400	400	0	400
加圧器バックアップヒータ	346	0	346	0	0	0	0	0
2次系冷却水ポンプ	0	0	360	0	360	0	0	0
その他の負荷	684	538	536.5	423	536.5	313	396.5	313
合計負荷容量(kW)	4,520	2,660	2,910	2,050	3,270	2,340	2,070	2,340
必要な負荷量合計	約108MWh(20時間)						約4.4MWh(1時間あたり)	

【ディーゼル発電機の継続運転時間計算】

非常用ディーゼル発電機の燃料タンク容量は約120kLであり、燃費は約0.250kL/MWhである。

i). 「冷温停止に移行」での燃料消費量は以下のとおり約27kLとなる。

$$\text{燃料消費量} = 0.250\text{kL/MWh} \times 108\text{MWh} = \text{約}27\text{kL}$$

ii). 「冷却維持」できる時間は以下のとおり約84時間となる。

$$\text{時間} = (120\text{kL} - 27\text{kL}) / (0.250\text{kL/MWh} \times 4.4\text{MWh}) = \text{約}84\text{時間}$$

よって、継続運転時間は、i) + ii) より、約104時間で約4.3日間となる。

設備の概要及び保全内容（給水機能に係る設備）

蒸気発生器への給水機能

設備	分類	設備概要	保全頻度	保全内容	備考	
タービン動補助給水ポンプ	イ)	容量 m <sup>3</sup> /h	119.4	4定検に1回	部品の目視点検、取替など	
		揚程 m	950	1ヶ月間に1回	起動試験	
電動補助給水ポンプ	イ)	容量 m <sup>3</sup> /h	110	4定検に1回	部品の目視点検、取替など	空冷式非常用発電装置による電源供給
		揚程 m	950	1ヶ月間に1回	起動試験	
補助復水タンク	イ)	容量 m <sup>3</sup>	800	6定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	
		基数	1			
No.3淡水タンク	ロ)	容量 m <sup>3</sup>	10000	10年間に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	
		基数	1			
主復水タンク	ロ)	容量 m <sup>3</sup>	1150	10定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	
		基数	1			
消防ポンプ	ハ)	容量 m <sup>3</sup> /h	46.0	1年に2回	各部の目視確認、作動確認など	燃料:ガソリン
		放水圧力 MPa	0.8	1年に1回	運転状況、放水性能等の確認	

使用済燃料ピットへの給水機能

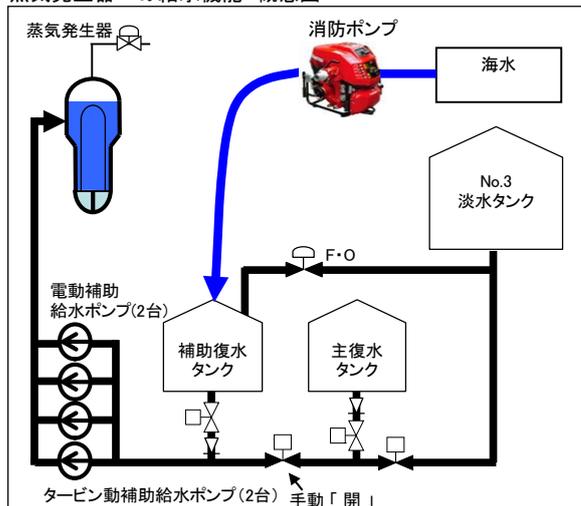
設備	分類	設備概要	保全頻度	保全内容	備考	
No.1淡水タンク	ハ)	容量 m <sup>3</sup>	10000	10年間に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	
		基数	1			
No.3淡水タンク	ハ)	容量 m <sup>3</sup>	10000	10年間に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	
		基数	1			
1次系純水タンク	ハ)	容量 m <sup>3</sup>	424	10定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など ダイヤフラム取替	
		基数	2			
1次系純水ポンプ	ハ)	容量 m <sup>3</sup> /h	34.1	15定検に1回	部品の目視点検、取替など	空冷式非常用発電装置による電源供給
		揚程 m	76.2	3ヶ月間に1回	定期切替	
消防ポンプ	ハ)	容量 m <sup>3</sup> /h	48.0	1年に2回	各部の目視確認、作動確認など	燃料:ガソリン
		放水圧力 MPa	0.9	1年に1回	運転状況、放水性能等の確認	
屋内消火栓	ハ)	放水量 m <sup>3</sup> /h (実績値)	36.6	1年に2回	外観点検 各部漏えい確認	
		放水圧力 MPa	0.17~0.7			
屋外消火栓	ハ)	放水量 m <sup>3</sup> /h (実績値)	37.8	1年に2回	外観点検 各部漏えい確認	
		放水圧力 MPa	0.25~0.6			

分類の説明

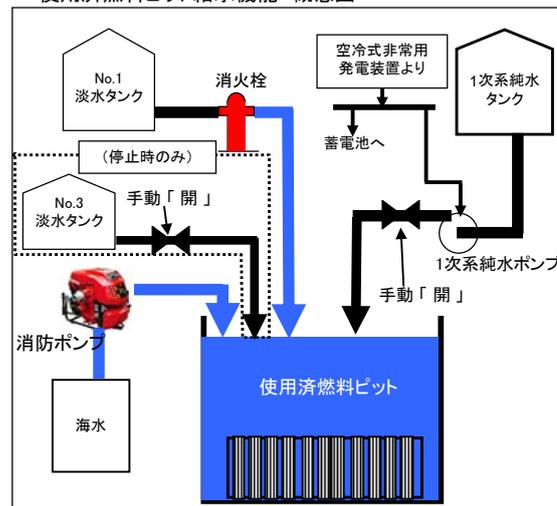
・防護措置に係る設備を以下に分類する。

記号	分類
イ)	工事計画で対象とした設備
ロ)	実施済みのアクシデントマネジメント設備
ハ)	緊急安全対策(短期)
ニ)	設備強化対策(緊急安全対策に係る実施状況報告書にて計画されているもののうち設置済みの設備)

蒸気発生器への給水機能 概念図



使用済燃料ピット給水機能 概念図



設備の概要及び保全内容（電源機能に係る設備）

電源機能

設備	分類	設備概要		保全頻度	保全内容	備考
非常用ディーゼル発電機	イ)	出力 kW	5500	2定検に1回	分解点検	
		台数	2	1ヶ月間に1回	起動試験、負荷試験(各1回)	
蓄電池	イ)	定格容量 AH	2500	6ヶ月間に1回	目視点検 蓄電池測定・補水 均等充電	
		台数	2			
空冷式非常用発電装置	ニ)	容量 kVA	1825	2週間に1回	起動試験	燃料:重油
		台数	2			
補助ボイラ燃料タンク	ハ)	容量 m <sup>3</sup>	250	13年間に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	重油を備蓄
		基数	2			
1号機非常用ディーゼル発電機 燃料タンク(※)	ニ)	容量 m <sup>3</sup>	70	10定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	重油を備蓄
		基数	2			
2号機非常用ディーゼル発電機 燃料タンク(※)	ニ)	容量 m <sup>3</sup>	70	10定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	重油を備蓄
		基数	2			
3号機非常用ディーゼル発電機 燃料貯蔵タンク(※)	ニ)	容量 m <sup>3</sup>	165	10定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	重油を備蓄
		基数	2			
4号機非常用ディーゼル発電機 燃料貯蔵タンク(※)	ニ)	容量 m <sup>3</sup>	165	10定検に1回	タンク内部の目視点検、パッキン類の取替など	重油を備蓄
		基数	2			

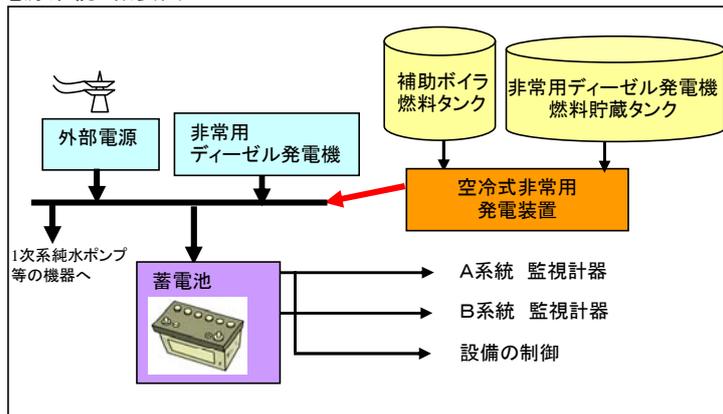
(※)総称して非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンクと呼ぶ

分類の説明

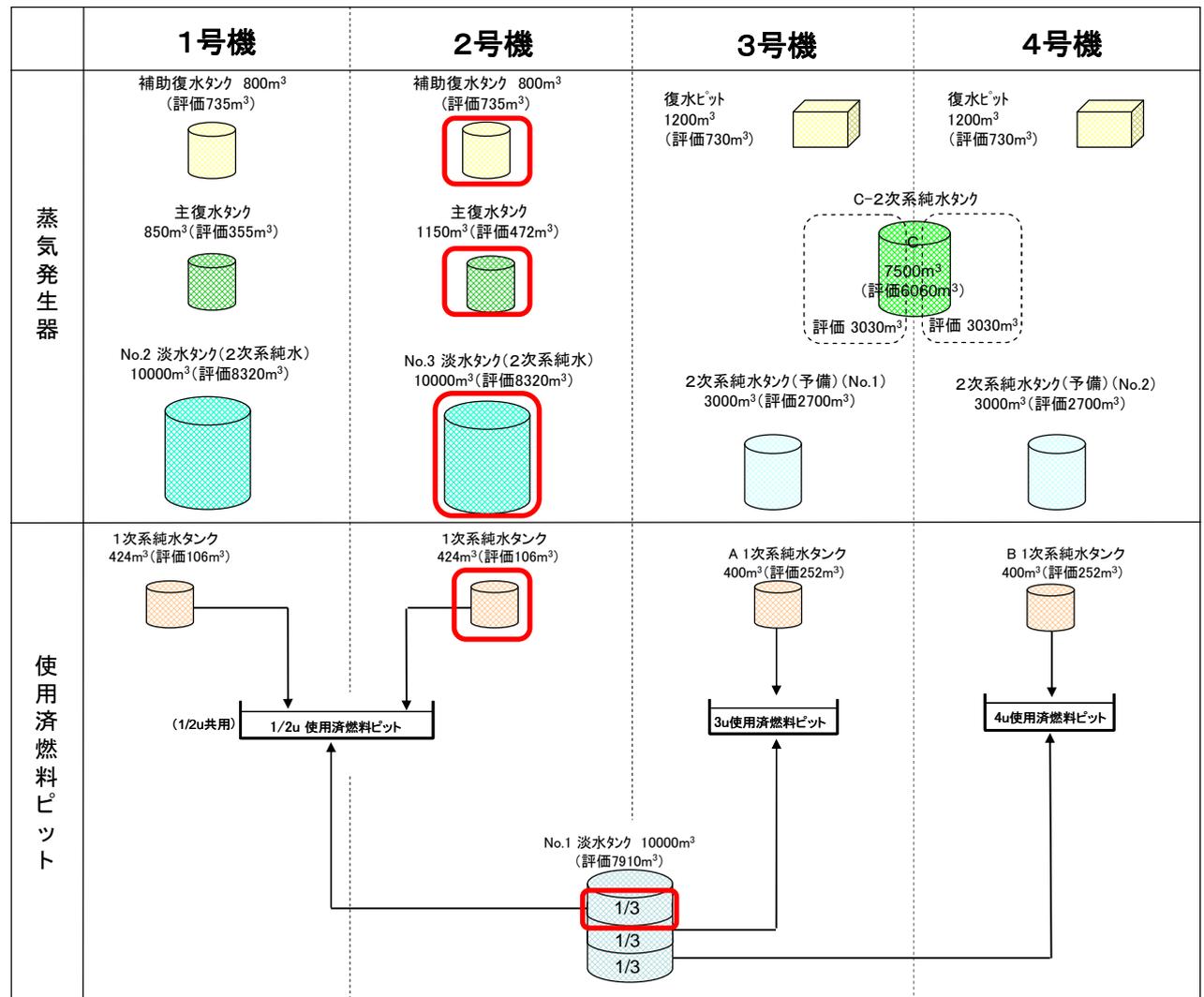
・防護措置に係る設備を以下に分類する。

記号	分類
イ)	工事計画で対象とした設備
ロ)	実施済みのアクシデントマネジメント設備
ハ)	緊急安全対策(短期)
ニ)	設備強化対策(緊急安全対策に係る実施状況報告書にて計画されているもののうち設置済みの設備)

電源系統 概要図

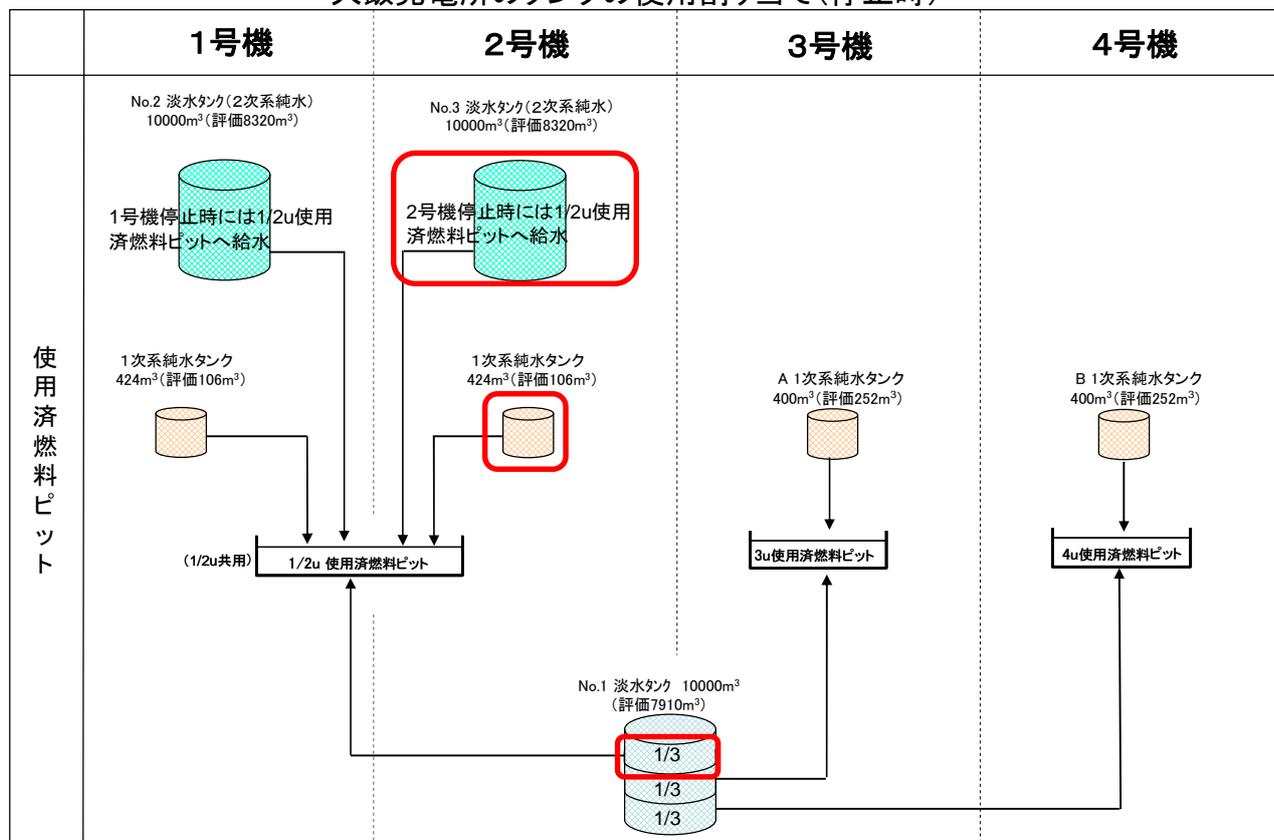


大飯発電所のタンクの使用割り当て(運転時)



( )内は評価に使用する保有水量: 補助復水タンク、復水ピットは保安規定値の水量、緊急安全対策以外には使用しない大飯3、4号機用の2次系純水タンク(予備)は90%の保有水量、1次系純水タンクは運用水位、その他は水位低警報設定の保有水量とした。

大飯発電所のタンクの使用割り当て(停止時)



( )内は評価に使用する保有水量：1次系純水タンクは運用水位、淡水タンクは水位低警報設定の保有水量とした。

## 防護措置の実施に係る組織等の状況確認

### 1) 組織、実施体制、連絡通報体制

防護措置の実施に係る組織・体制は、大飯発電所において「電源機能等喪失時における原子炉施設の保全のための活動に係る対応所達」を制定（平成 23 年 4 月 12 日）している。添付 5-(4)-5(2/4)に体制表を示す。

この、「電源機能等喪失時における原子炉施設の保全のための活動に係る対応所達」では、電源応急復旧のための活動、蒸気発生器への給水確保のための活動および使用済燃料ピットへの給水確保のための活動を遂行するための体制、役割分担、要員配置、手順、訓練、資機材等について定めている。

### 2) 手順書

防護措置の実施に係る手順書は、「電源機能等喪失時における原子炉施設の保全のための活動に係る対応所達」および「大飯発電所 1, 2 号機事故時操作所則」に具体的な手順書を定めている。

これら社内標準は、防護措置の実施に必要な資機材の追加・変更、または実施手順の追加・変更等がある毎に適切に改正している。

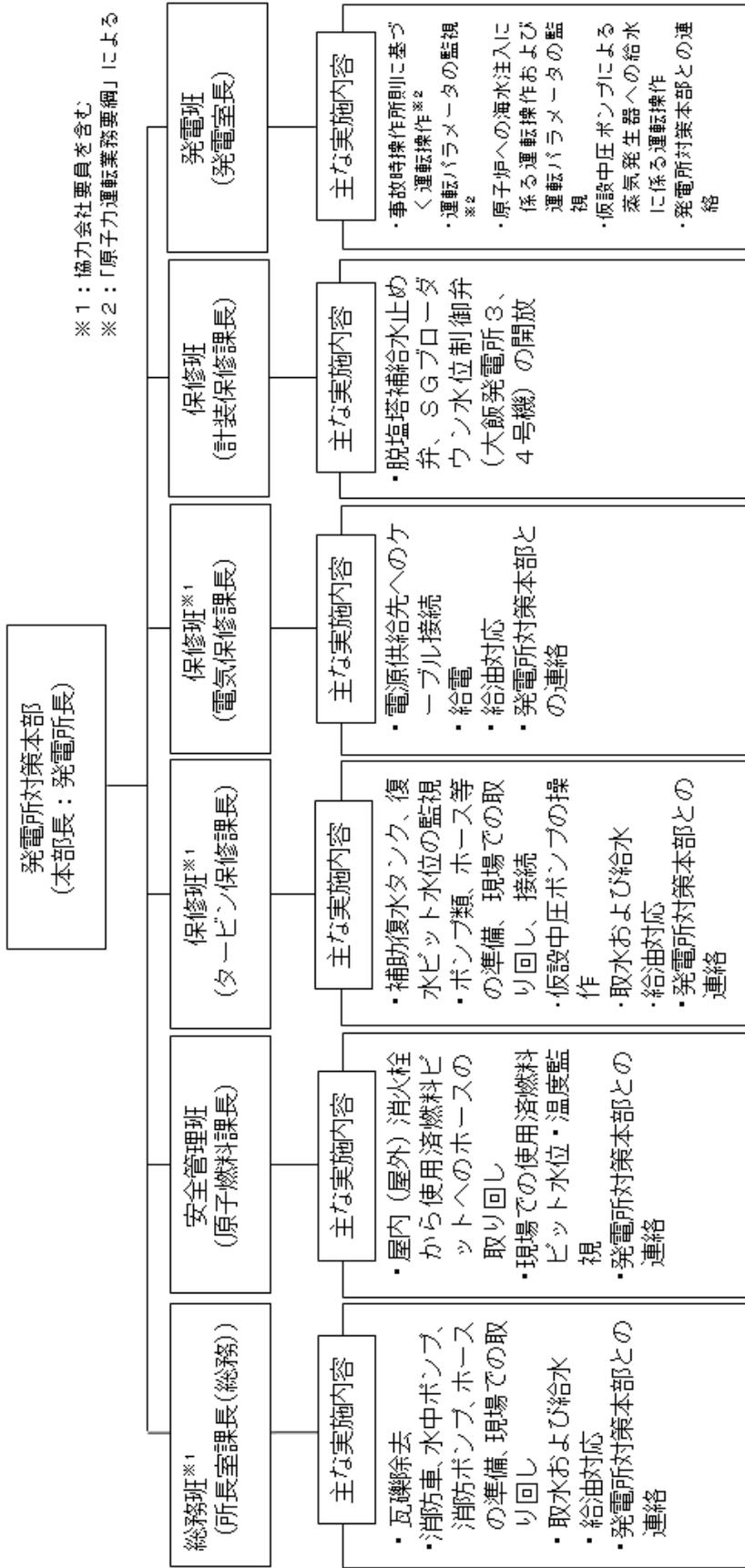
### 3) 教育・訓練の状況

防護措置の実施に係る教育・訓練は、「電源機能等喪失時における原子炉施設の保全のための活動に係る対応所達」および「運転員教育訓練要綱指針」に実施項目、対象者、頻度等を定めている。

「電源機能等喪失時における原子炉施設の保全のための活動に係る対応所達」の制定にあたっては、電源応急復旧のための活動、蒸気発生器への給水確保のための活動および使用済燃料ピットへの給水確保のための活動に関する全ての方法について、夜間や照明が使えない等で視界が悪い場合をも含めた訓練を実施し、改善点を抽出し、フィードバックを行った。また、実施手順の追加・変更等を踏まえて社内標準を改正する際にも、当該の手順の訓練を実施したうえで、改善点を抽出し、改正している。添付 5-(4)-5(3/4)、(4/4)に訓練の実績を示す。

また、「運転員教育訓練要綱指針」を改正し、これまでも継続的に実施しているシミュレータによる地震対応訓練において、交流電源を供給する全ての設備の機能、海水を使用して原子炉施設を冷却する全ての設備の機能および使用済燃料ピットを冷却する全ての設備の機能の喪失を想定した教育・訓練を行うことを定めている。

体制、役割分担、および要員配置



初期対応要員 \* 6名  
\* 事象発生後速やかに必要な要員(発電室当直員を除く)

(初期対応における使用済燃料ピットの監視は発電室当直員が実施)

※1：協力会社要員を含む  
※2：「原子力運転業務要綱」による

出典：大飯発電所電源機能等喪失時における原子炉施設の保全のための活動に係る対応所達(平成24年6月27日最終改正)

## 訓練実施結果

&lt;大飯2号機&gt;

訓練内容		訓練実施日	所要時間	訓練結果及び改善点
電源車による 電源応急復旧	電源車の配置、ケーブル敷設、 制御盤への繋ぎ込み、給電	4月10日 (休日の訓練) 4月12日 <sup>*1</sup>	40分 (D/G 室)	訓練結果:良好  *1:燃料補給訓練(4号機D/G室側の訓練で代える。) *2:オープンハッチで対応が同様である項目については、一部1号機D/G室、オープンハッチの訓練時間で代えた。
		4月11日 4月12日 <sup>*1</sup>	46分 <sup>*2</sup> (オープン ハッチ)	
	全ユニット(1号機~4号機)が同時に全交流電源喪失した場合の初動対応を想定した、電源車の配置、ケーブル敷設、制御盤への繋ぎ込み、給電	4月25日	135分 <sup>*3</sup>	訓練結果:良好  *3:1号機~4号機の全てのユニットへの給電が完了するまでの時間
蒸気発生器への 給水確保	方法① 補助復水タンクからの水補給	4月6日	-	訓練結果:良好
	方法② 淡水タンク(No2.3)から補助復水タンクへの補給	4月8日	7分	訓練結果:良好
	方法③ 主復水タンクからの水補給	4月6日	25分	訓練結果:良好 改善点:施錠扉の鍵及びヘルメット取付けライトを中央制御室に配備するとより速やかな対応が可能となる。
	方法④ No2.3淡水タンクからの水補給	4月6日	24分	訓練結果:良好 改善点:施錠扉の鍵及びヘルメット取付けライトを中央制御室に配備するとより速やかな対応が可能となる。
	方法⑤ 海水からの水補給(消防ポンプ)	4月8日	60分	訓練結果:良好 改善点:当初計画したポンプ、ホースの数では流量等に十分な余裕があったため、作業効率の観点からポンプ、ホースの数を最適化する。また、連絡手段としてトランシーバー等を配備すると作業効率が向上する。
使用済燃料ピットへの 給水確保	方法① 淡水タンクからの水補給(屋内消火栓)	4月11日	34分	訓練結果:良好  注)大飯1、2号機のSFPIは共用設備であるため、大飯1号機の訓練結果に同じ。
	方法② 淡水タンクからの水補給(屋外消火栓)	4月11日	38分	
	方法③ 1次系純水タンクからの水補給	4月8日	24分	
	方法④ 海水からの水補給(消防ポンプ)	4月7日	57分	

## 訓練実施結果

### <大飯 2 号機>

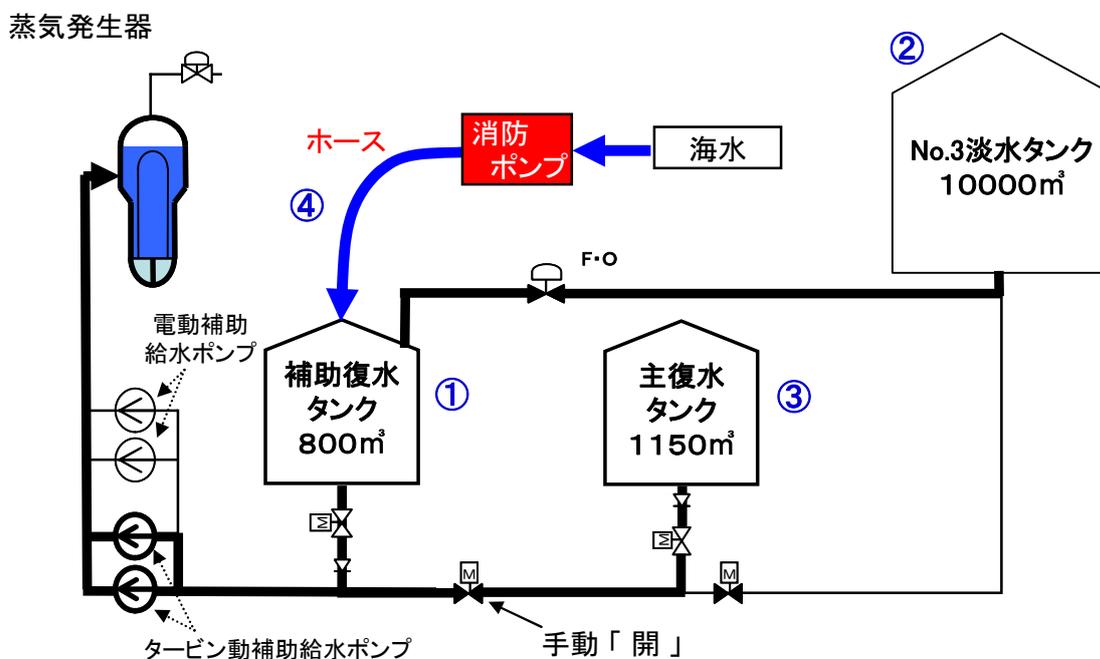
訓練内容		訓練実施日	所要時間	訓練結果および改善点
空冷式非常用 発電装置による 電源応急復旧	ケーブルコネクタ接続、 起動	9 月 22 日	77 分*1	訓練結果：良好  *1：燃料補給訓練を併せて実施。(うち 26 分)
	全ユニット (1~4 号機) が同時に全交流電源喪 失した場合の初動対応 を想定したケーブルコ ネクタ接続、起動	9 月 28 日	78 分*2	訓練結果：良好  *2：1 号機~4 号機の全ての 装置の起動が完了するまで の時間

蒸気発生器への給水機能（大飯 2 号機）

1. 蒸気発生器への給水方法

全交流電源喪失時に、以下の各水源からタービン動補助給水ポンプにより蒸気発生器 2 次側へ給水することにより、一次冷却材系統の除熱を行い、プラントを安定維持させる。

- ① 補助復水タンクからの給水
- ② No.3 淡水タンクからの給水
- ③ 主復水タンクからの給水
- ④ 海水（消防ポンプによる補給）



2. 蒸気発生器への補給水源

水源	容量	2号機の評価に用いた保有水量
補助復水タンク	約 800 m <sup>3</sup>	735 m <sup>3</sup> ：保安規定値
No. 3 淡水タンク	約 10000 m <sup>3</sup>	8320 m <sup>3</sup> ：タンクの水位低警報設定容量とした。
主復水タンク	約 1150 m <sup>3</sup>	472 m <sup>3</sup> ：タンクの水位低警報設定容量とした。
海水	—	—

3. 給水量評価に用いた崩壊熱

炉心崩壊熱については、最も厳しい条件となるよう 55,000MWd/t (3 回照射)、36,700MWd/t (2 回照射) 及び 18,300MWd/t (1 回照射) の燃焼度のウラン燃料 (初期濃縮度 4.8wt%) が 1/3 ずつ存在するとし、約 1 年間運転した状態を想定した。

崩壊熱は、「軽水型動力炉の非常用炉心冷却系の性能評価指針 (昭和 56 年 7 月 20 日原子力安全委員会決定、平成 4 年 6 月 11 日一部改訂)」において使用が認められている日本原子力学会推奨値 (不確定性 (3σ) 込み) を用いた。アクチノイド崩壊熱に関しては十分実績のある ORIGEN2 コード評価値 (不確定性 (20%) 込み) を用いた。

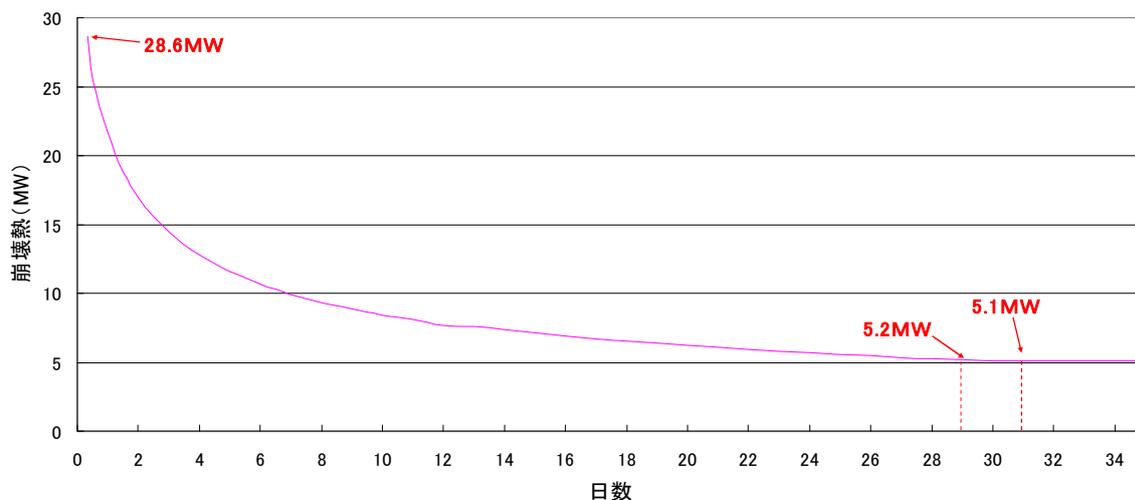


図 1 崩壊熱の変化

4. 給水流量の評価

全蒸気発生器 (4 ループ分) へのトータル必要補給水量は以下の式にて計算した。

$$S/G \text{ 必要補給水量} [m^3/h] = \frac{\text{崩壊熱} [MW] \times 10^3 \times 3600}{(S/G \text{ 次側飽和蒸気比エンタルピー} - \text{補給水比エンタルピー}) [kJ/kg] \times \text{補給水密度} [kg/m^3]}$$

・・・式 1

【計算条件】	S/G 次側飽和蒸気比エンタルピー (150°C)	: 2745 kJ/kg *1
	補給水比エンタルピー (40°C)	: 167 kJ/kg *1
	補給水密度 (40°C)	: 992 kg/m³ *1

\* 1: 1999 日本機械学会蒸気表

- 全交流電源喪失直後から 5 時間については、補助復水タンクからタービン動補助給水ポンプを用いて蒸気発生器 2 次側に給水する。補助復水タンクからの給水により、一次冷却材系統の 170°C までの冷却と、全交流電源喪失からの崩壊熱除去を行う。
- 補助復水タンクの水がなくなると、No. 3 淡水タンクを水源とするよう系統を変更し、同様にタービン動補助給水ポンプにより給水を行なう。この時点での崩壊熱は、図 1 から、

28.6MW であり、この崩壊熱を除去するのに必要な水量は式 1 より約 41 m<sup>3</sup>/h である。その後、崩壊熱量の低下とともに補給水量についても低減しながら原子炉冷却を進め、No. 3 淡水タンク保有水量がなくなる事象発生後約 29 日後には、崩壊熱は 5.2MW、必要水量は約 8m<sup>3</sup>/h となる。

- その後、水源を主復水タンクに変更し、引き続き蒸気発生器 2 次側へ給水を行なう。
- 事象発生後約 31 日後 (No. 3 淡水タンク以降約 2 日後) には、主復水タンク内の水もなくなり、海水を補助復水タンクへ補給し蒸気発生器 2 次側に給水することになる。この時点での崩壊熱は 5.1MW、必要となる水量は約 8 m<sup>3</sup>/h である。

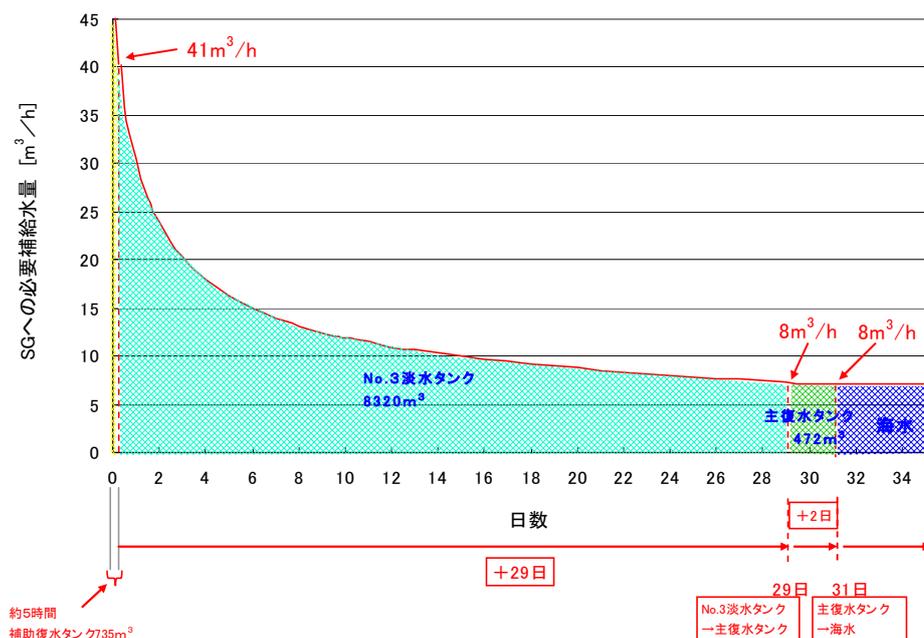


図 2 水源と補給水量の変化

必要補給水量

	No. 3 淡水タンク への切替時	主復水タンク への切替時	海水への切替時
必要補給水量	約 41 m <sup>3</sup> /h	約 8 m <sup>3</sup> /h	約 8 m <sup>3</sup> /h

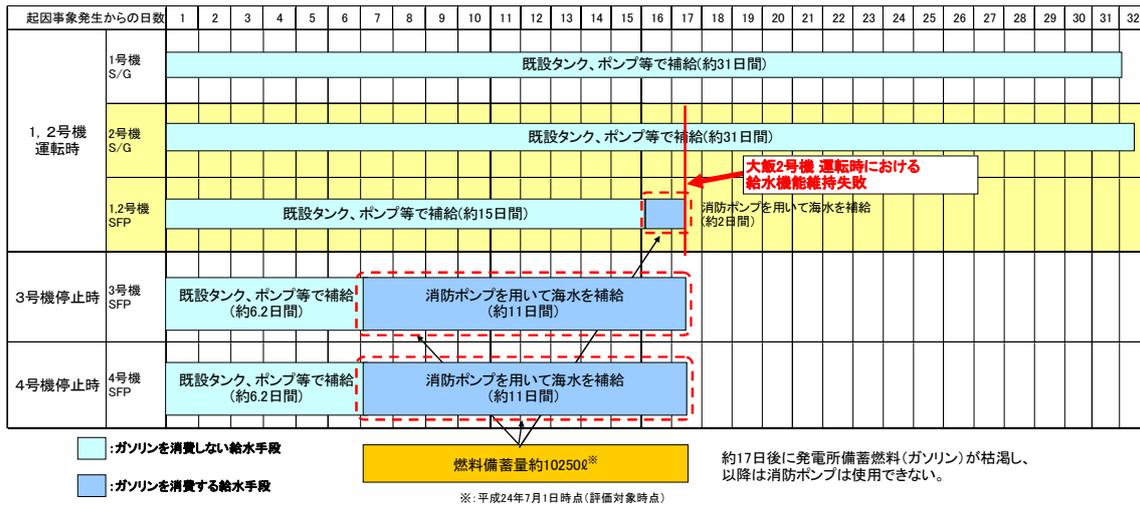
以上より、各水源からの補給水の供給可能時間は下表のとおりとなる。

補給水供給可能時間

補助復水タンク	約 5 時間
No. 3 淡水タンク	約 29 日
主復水タンク	約 2 日
海水	燃料補給が継続する時間

### 給水機能と消防ポンプ燃料(ガソリン)消費量の関係 (2号機運転時)

海水等の補給に用いる消防ポンプの燃料(ガソリン)は、発電所共有としており2号機以外(1,3,4号機)にも使用することから、全号機同時に全交流電源喪失が発生したと仮定し、発電所備蓄ガソリンの消費が早くなる他号機の初期状態(運転時又は停止時)の組合せを設定して評価を行った。評価の結果、下表のとおり1号機が運転時、3,4号機が停止時の場合に発電所備蓄ガソリンの枯渇は早くなり、約17日後に枯渇することとなる。



#### (参考) 1, 3, 4号機の初期状態(運転時又は停止時)の検討



⇒1号機が運転時の方がガソリン消費は早い



⇒3号機が停止時の方がガソリン消費は早い



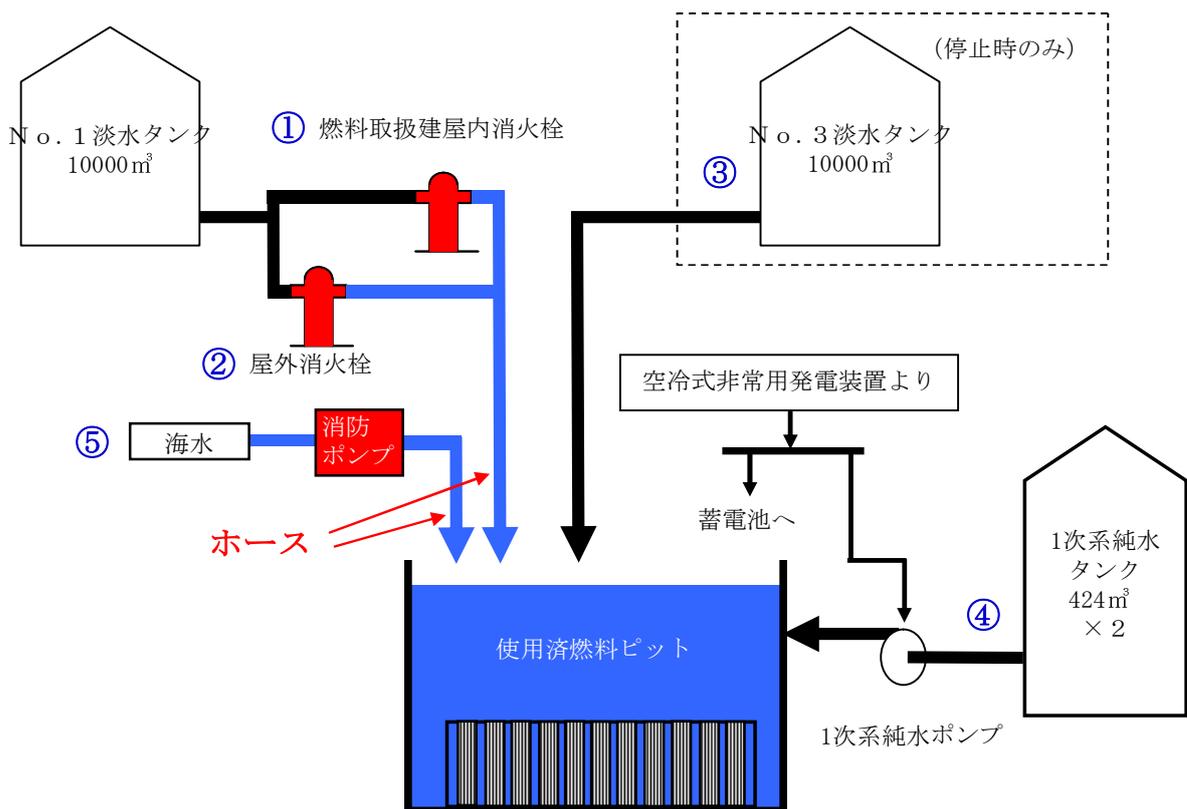
⇒4号機が停止時の方がガソリン消費は早い

使用済燃料ピット（SFP）への給水機能（大飯2号機）

1. SFPへの給水方法

全交流電源喪失時に使用済燃料ピット冷却系統が使用不能となった場合に、SFP保有水の蒸散量を補うために以下の水源からSFPへ給水を行う。なお、SFPへの給水はSFP水位を維持する形で行う。

- ① No. 1 淡水タンクからの給水（燃料取扱建屋内消火栓）
- ② No. 1 淡水タンクからの給水（屋外消火栓）
- ③ No. 3 淡水タンクからの給水
- ④ 1次系純水タンクからの給水（1次系純水ポンプ）
- ⑤ 海水（消防ポンプによる補給）



2. SFPへの補給水源

水源	容量	評価に用いた保有水量
No. 1 淡水タンク	10,000 m <sup>3</sup> × 1 基	2,636 m <sup>3</sup> : タクの水位低警報値 7,910 m <sup>3</sup> のうち 1, 2 号機用評価水量
No. 3 淡水タンク (停止時のみ)	10,000 m <sup>3</sup> × 1 基	8,320 m <sup>3</sup> : タクの水位低警報値
1次系純水タンク	424 m <sup>3</sup> × 2 基	212 m <sup>3</sup> : タク 1 基の運用水位 106 m <sup>3</sup> × 2 基
海水	—	—

3. 給水量評価に用いた崩壊熱

SFPの崩壊熱評価条件としては、原子炉運転停止中（停止時）と原子炉運転中（運転時）の2つの条件を設定し評価した。

停止時については、原子炉の運転停止後、全ての燃料が原子炉からSFPに移送された状態とし、過去の許認可におけるSFPの崩壊熱除去に係る評価に使用した条件を用いた。評価条件を表1に示す。

運転時については、上記評価に対し、運転中の状態を考慮し以下の条件を追加した。

- ・ 停止時に一時的に取り出された1回及び2回照射燃料については炉心に装荷されているためSFPの評価ではこれらは考慮しない。
- ・ 使用済燃料の冷却期間については、運転開始（停止期間30日）直後とする。

なお、核分裂生成物崩壊熱に関しては「軽水型動力炉の非常用炉心冷却系の性能評価指針（昭和56年7月20日原子力安全委員会、平成4年6月11日一部改訂）」においてその使用が認められている日本原子力学会推奨値（不確定性（3σ）込み）を用いて評価を行い、アクチノイド崩壊熱に関しては、十分実績のあるORIGEN2コード評価値（不確定性（20%）込み）を用いて両評価を行った。

表1 崩壊熱評価条件

大飯1, 2号機	
燃料条件	ウラン燃料 ・ 燃焼度：3回照射燃料 55,000Mwd/t 2回照射燃料 36,700Mwd/t 1回照射燃料 18,300Mwd/t ・ ウラン濃縮度：4.8wt%
運転期間	13ヶ月
停止期間	30日
燃料取出期間	8.5日

注：大飯1～4号機55GWd/t燃料使用等に伴う原子炉設置変更許可申請（平成14年8月申請）安全審査におけるSFP冷却設備の評価条件

4. 給水流量の評価

SFPへの必要補給水量は、SFP保管の燃料の崩壊熱Qによる保有水の蒸散量  $\Delta V / \Delta t$  (m<sup>3</sup>/h) として、下記式1で計算した。

$$\Delta V / \Delta t \text{ (m}^3\text{/h)} = Q \text{ (kW)} \times 3600 / (\rho \text{ (kg/m}^3\text{)} \times h_{fg} \text{ (kJ/kg)}) * 1 \quad \dots \text{【式1】}$$

$\rho$ (飽和水密度)	: 958kg/m <sup>3</sup>	* 2 (プラント共通)
$h_{fg}$ (飽和水蒸発潜熱)	: 2,257kJ/kg	* 2 (プラント共通)
Q (SFP崩壊熱)	: 11,943kW	* 3 (大飯2号機, 停止時)
	: 4,693kW	* 3 (大飯2号機, 運転時)

- \*1 :  $(\rho \times \Delta V)$  (kg) の飽和水が蒸気になるための熱量は  $h_{fg} \times (\rho \times \Delta V)$  (kJ) で、使用済燃料の  $\Delta t$  時間あたりの崩壊熱量  $Q \Delta t$  に等しい。  
 なお、保有水は保守的に大気圧下での飽和水 (100°C) として評価している。
- \*2 : 物性値の出典 : 国立天文台編「理科年表」
- \*3 : 表 3 参照。S F P 崩壊熱については、時間の経過とともに低下していくが、保守的に一定として評価している。

以上から、崩壊熱による保有水の蒸散を補うために必要な補給水量は、蒸散量  $\Delta V / \Delta t$  ( $m^3/h$ ) と等しく、全炉心取出しを考慮する停止時については  $19.88 m^3/h$ 、運転時については、 $7.81 m^3/h$  となる。

各水源からの補給水の供給可能時間は、水源の容量と上記補給水量から求められ、表 2 のとおりである。

表 2. 各水源からの補給水の供給可能時間

	停止時	運転時
No. 1 淡水タンク	約 6 日	約 1 4 日
No. 3 淡水タンク	約 1 7 日	—
1 次系純水タンク	約 1 1 時間	約 2 7 時間
海水	燃料補給が継続する期間	燃料補給が継続する期間

以上

表 3-1 停止時に想定する S F P 保管燃料と崩壊熱 (大飯 1, 2 号機)

取出燃料	大飯 1 号機からの発生分			大飯 2 号機からの発生分		
	冷却期間	燃料数	崩壊熱 (MW)*	冷却期間	燃料数	崩壊熱 (MW)*
4 サイクル冷却済燃料	4 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日	1 / 3 炉心	0.105			
				3 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日 + 30 日	1 / 3 炉心	0.136
3 サイクル冷却済燃料	3 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日	1 / 3 炉心	0.140			
				2 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日 + 30 日	1 / 3 炉心	0.209
2 サイクル冷却済燃料	2 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日	1 / 3 炉心	0.215			
				1 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日 + 30 日	1 / 3 炉心	0.376
1 サイクル冷却済燃料	1 × (13 ヶ月 + 30 日) + 8.5 日	1 / 3 炉心	0.398			
				8.5 日 + 30 日	1 / 3 炉心	1.635
定検時取出燃料 3	8.5 日	1 / 3 炉心	3.144			
定検時取出燃料 2	8.5 日	1 / 3 炉心	2.912			
定検時取出燃料 1	8.5 日	1 / 3 炉心	2.673			
小計			9.587			2.356
崩壊熱合計 (MW)	崩壊熱 : 11.943MW (燃料体数 : 704体)					

\* : 崩壊熱の合計は、四捨五入の関係で個々の発生熱量の合計とはならない場合がある。

注 1 : 大飯 1 ~ 4 号機 55,000MWd/t 燃料使用等に伴う原子炉設置変更許可申請 (平成 14 年 8 月申請) 安全審査における S F P 冷却設備の評価条件

注 2 : 大飯 1, 2 号機の S F P の燃料保管容量は 704 体

表 3-2 運転時に想定する SFP 保管燃料と崩壊熱 (大飯 1, 2 号機)

取出燃料	大飯 1 号機からの発生分			大飯 2 号機からの発生分		
	冷却期間	燃料数	崩壊熱 (MW)*	冷却期間	燃料数	崩壊熱 (MW)*
4 サイクル冷却済燃料	4 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日	1 / 3 炉心	0.103			
				3 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日 + 30 日	1 / 3 炉心	0.134
3 サイクル冷却済燃料	3 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日	1 / 3 炉心	0.137			
				2 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日 + 30 日	1 / 3 炉心	0.205
2 サイクル冷却済燃料	2 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日	1 / 3 炉心	0.210			
				1 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日 + 30 日	1 / 3 炉心	0.362
1 サイクル冷却済燃料	1 × (13 ヶ月 + 30 日) + 30 日	1 / 3 炉心	0.381			
				30 日 + 30 日	1 / 3 炉心	1.335
定検時取出燃料 3	30 日	1 / 3 炉心	1.826			
定検時取出燃料 2	(炉心)	0	0			
定検時取出燃料 1	(炉心)	0	0			
小計			2.657			2.036
崩壊熱合計 (MW)	崩壊熱 : 4.693MW (燃料体数 : 579体)					

\*: 崩壊熱の合計は、四捨五入の関係で個々の発生熱量の合計とはならない場合がある。

## 電源容量と継続時間評価

### 1. 蓄電池

大飯 2 号機の直流電源装置は、蓄電池及び充電器で構成されており、直流母線に接続されている。安全系蓄電池は容量 2500AH のものが 2 系列あり、440V 安全系交流母線より各々充電器を介して接続されている。

全交流電源喪失後、電源車による給電が開始されるまでの間は、蓄電池により直流母線へ給電されるが、現状の蓄電池定格容量と 5 時間給電必要容量を比較した結果、5 時間の給電が可能であることを確認している。

なお、容量評価については、据置蓄電池の容量算出法（電池工業会規格 SBA-S-0601:2001）に基づき算出した。

2500AH（定格容量）	>	1719AH（5時間必要容量）
--------------	---	-----------------

## ◆蓄電池負荷パターン

## 2A 蓄電池負荷リスト

負荷名称	0～10秒	10～60秒	1～5分	5～30分	30～60分	60～299分	299～300分
4-2 Aメタクラ	48.0	69.4	4.4	4.4	4.4	4.4	69.4
4-2 C 1メタクラ	42.0	0.0	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0
4-2 C 2メタクラ	30.0	0.0	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0
2 A中央制御室直流分電盤	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0	15.0
1、2 B 5 0 0 K V 特高開閉所直流分電盤	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0	5.0
2 Aディーゼル発電機界磁	90.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
2タービン動給水ポンプ起動盤	0.0	0.0	3.0	3.0	0.0	0.0	0.0
2タービン室直流分電盤	6.0	6.0	6.0	40.2	0.0	0.0	0.0
2 H計器用インバータ	75.0	75.0	75.0	75.0	0.0	0.0	0.0
2非常用密封油ポンプ	180.0	120.0	120.0	120.0	0.0	0.0	0.0
3-2 Aパワーセンタ	27.5	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
3-2 C 1パワーセンタ	25.0	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0
3-2 C 2パワーセンタ	20.0	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0
2 A補機室直流分電盤	8.0	8.0	8.0	8.0	0.0	0.0	0.0
2 A計器用インバータ	140.0	140.0	140.0	140.0	140.0	140.0	140.0
2 C計器用インバータ							
2 Aタービン動補助給水ポンプ起動盤	24.0	24.0	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
メタクラしゃ断器試験盤	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 Aディーゼル発電機盤	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
2 A電動補助給水ポンプ起動盤	1.0	1.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0
1・2 C 直流非常灯分電盤	41.0	41.0	41.0	41.0	41.0	41.0	41.0
2 A変圧器直流分電盤	17.8	9.8	1.8	1.8	0.0	0.0	0.0
直流母線遮断器制御電源 (直流母線遮断器投入回路電源)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 B連絡遮断器制御電源 (2 B連絡遮断器投入回路電源)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
直流警報電源	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計 (A)	799.5	525.4	443.6	477.8	216.8	216.8	281.8

## 2B 蓄電池負荷リスト

負荷名称	0～10秒	10～60秒	1～5分	5～30分	30～60分	60～299分	299～300分
3-2 Bパワーセンタ	25.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0
3-2 D 1パワーセンタ	27.5	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0
3-2 D 2パワーセンタ	17.5	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0
3-2 Eパワーセンタ	37.5	2.0	2.0	2.0	0.0	0.0	0.0
2 B計器用インバータ	140.0	140.0	140.0	140.0	140.0	140.0	140.0
2 D計器用インバータ							
2 Bタービン室直流分電盤	4.0	4.0	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0
2 B変圧器室直流分電盤	18.7	10.7	2.7	2.7	0.0	0.0	0.0
2 Bディーゼル発電機盤	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
予 備	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 B補機室直流分電盤	6.3	6.3	6.3	6.3	0.0	0.0	0.0
メタクラしゃ断器試験盤 (SAFE)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
メタクラしゃ断器試験盤 (NO-SAFE)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
4-2 Bメタクラ	54.0	69.4	4.4	4.4	4.4	4.4	69.4
4-2 D 1メタクラ	30.0	4.0	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0
4-2 D 2メタクラ	42.0	4.0	4.0	4.0	0.0	0.0	0.0
2 Bタービン動補助給水ポンプ起動盤	24.0	24.0	4.2	4.2	4.2	4.2	4.2
2 Bディーゼル発電機界磁	90.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0
2 B電動補助給水ポンプ起動盤	1.0	1.0	1.0	1.0	0.0	0.0	0.0
2 B中央制御室直流分電盤	47.0	47.0	47.0	47.0	47.0	47.0	47.0
2非常用油ポンプ	795.0	477.0	341.7	341.7	0.0	0.0	0.0
直流母線遮断器制御電源 (直流母線遮断器投入回路電源)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
2 A連絡遮断器制御電源 (2 A連絡遮断器投入回路電源)	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
直流警報電源	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
合計 (A)	1363.7	800.6	572.5	572.5	202.8	202.8	267.8

◆評価条件

蓄電池形式 :1SF 2500Ah

最低許容電圧:1.75V

周囲温度 :25℃

◆評価結果

[2A 蓄電池]

$$C_{300} = \{1/0.9\} * \{799.5 * 6.28 + (443.6 - 799.5) * 6.24 + (477.8 - 443.6) * 6.20 \\ + (216.8 - 477.8) * 5.85 + (281.8 - 216.8) * 0.95\} = 1719Ah$$

よって、2500Ah > 1719Ah となり、5時間の給電は可能である。

[2B 蓄電池]

$$C_{300} = \{1/0.9\} * \{1363.7 * 6.28 + (572.5 - 1363.7) * 6.24 + (202.8 - 572.5) * 5.85 \\ + (267.8 - 202.8) * 0.95\} = 1696Ah$$

よって、2500Ah > 1696Ah となり、5時間の給電は可能である。

## 2. 空冷式非常用発電装置

全交流電源喪失後は直流電源装置の蓄電池により、中央制御室の監視機器等に電気を供給するが、蓄電池が枯渇する前に空冷式非常用発電装置を安全系母線に接続し、継続的に電気を供給する必要がある。

プラント監視機能を維持しつつ、原子炉及び使用済燃料ピットを冷却するために必要となる電源容量は約 436kVA と評価しており、その容量を上回る空冷式非常用発電装置を配備している。

## 原子炉除熱、運転監視継続のために必要な機器類の電源容量

プラント	緊急安全対策に必要な容量 [kVA] * 1	シビアアクシデント対応での追加対策に必要な容量 [kVA] * 2	必要容量 [kVA]	配備容量 [kVA]
大飯 1 号機	約 422	約 116	約 538	1825
大飯 2 号機	約 422	約 14	約 436	1825
大飯 3 号機	約 255	約 61	約 316	1825
大飯 4 号機	約 255	約 61	約 316	1825

\* 1 「平成 23 年福島第一・第二原子力発電所事故を踏まえた緊急安全対策に係る実施状況報告書（改訂版）（大飯発電所）（平成 23 年 9 月 15 日訂正）」にて給電するとして設備（直流電源、計器用電源、1 次系純水ポンプ、ほう酸ポンプ）

\* 2 「平成 23 年福島第一原子力発電所事故を踏まえたシビアアクシデントへの対応に関する措置に係る実施状況報告書（平成 23 年 6 月）」にて給電するとして設備（イグナイタ（大飯 1, 2）、アニュラス排気設備（大飯 3, 4）、中央制御室空調設備（大飯 1, 3, 4））

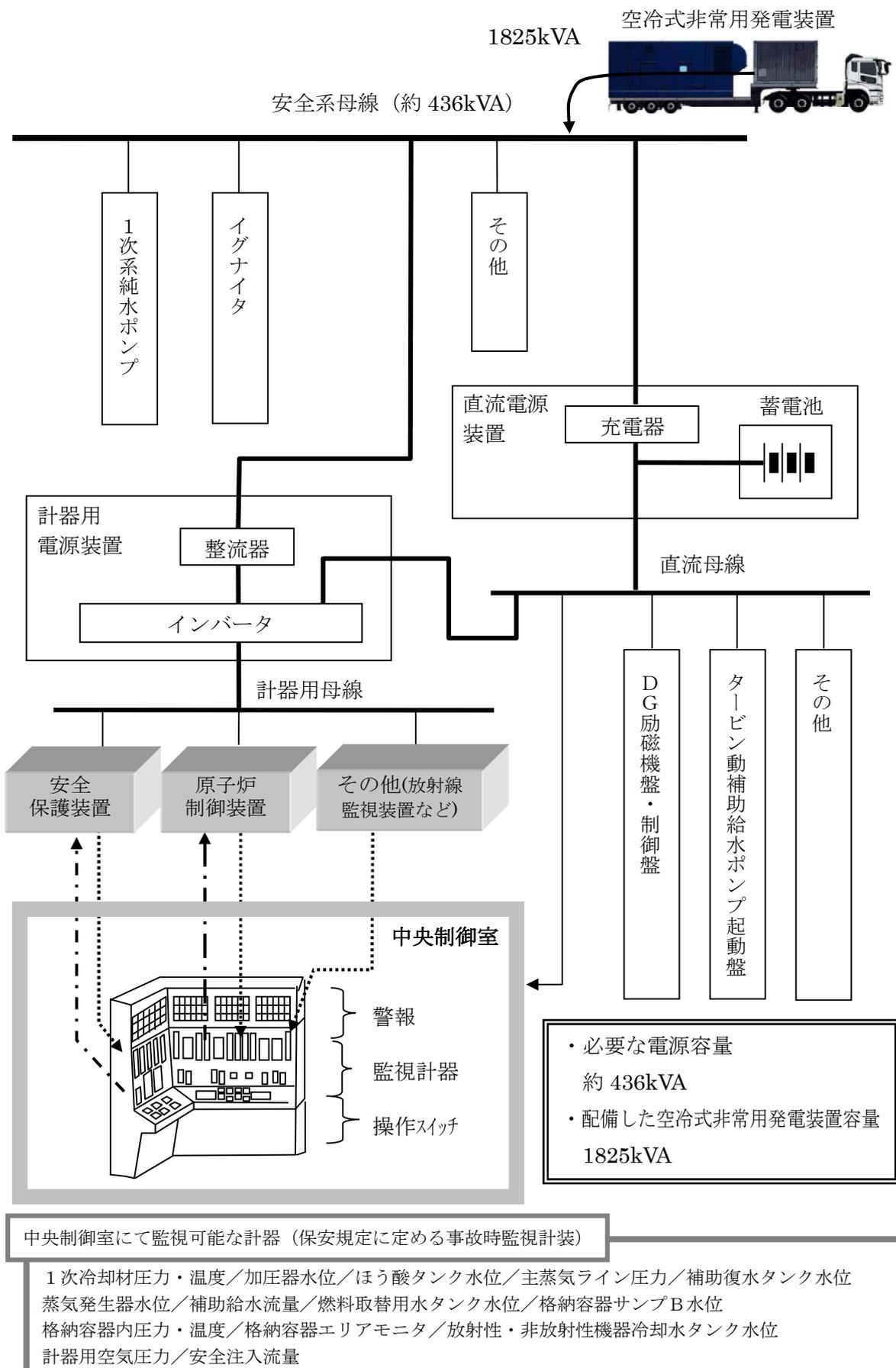
また、空冷式非常用発電装置は、発電所構内にある補助ボイラ燃料と非常用ディーゼル発電機燃料を消費しつつ発電するが、大飯 1～4 号機の各々に配備された空冷式非常用発電装置が同時に燃料を消費することを想定すると、1 時間当たり約 497.0 リットルの燃料が必要となる。一方、補助ボイラ燃料タンク容量（60%）は約 300m<sup>3</sup>、非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンク容量（使用可能量）は約 712m<sup>3</sup> であることから、燃料が枯渇する時間（給油可能連続日数）を約 85 日と評価している。

## 空冷式非常用発電装置の運転継続時間

プラント	必要な電源容量 [kVA]	配備容量 [kVA]	実負荷時の燃費 [L/h]		補助ボイラ燃料タンク容量(60%) [m <sup>3</sup> ]	非常用ディーゼル発電機燃料貯蔵タンク容量(使用可能量) [m <sup>3</sup> ]	継続運転日数 [日]
大飯 1 号機	約 538	1825	約 497.0	約 150.1	約 300	約 118	約 85
大飯 2 号機	約 436	1825		約 130.9		約 118	
大飯 3 号機	約 316	1825		約 108.0		約 238	
大飯 4 号機	約 316	1825		約 108.0		約 238	

以上

交流電源と直流電源および計器用電源負荷のイメージ (大飯 2 号機の例)



### 給水機能と消防ポンプ燃料(ガソリン)消費量の関係 (2号機停止時)

海水等の補給に用いる消防ポンプの燃料(ガソリン)は、発電所共有としており2号機以外(1,3,4号機)にも使用することから、全号機同時に全交流電源喪失が発生したと仮定し、発電所備蓄ガソリンの消費が早くなる他号機の初期状態(運転時又は停止時)の組合せを設定して評価を行った。評価の結果、下表のとおり1号機が運転時、3,4号機が停止時の場合に発電所備蓄ガソリンの枯渇は早くなり、約17日後に枯渇することとなる。



#### (参考) 2, 3, 4号機の初期状態(運転時又は停止時)の検討



⇒1,2号機共用SFPは、1,2号機原子炉から同時に燃料を受け入れる設計としていないため、2号機停止時の場合、1号機は運転時とした。



⇒3号機が停止時の方がガソリン消費は早い



⇒4号機が停止時の方がガソリン消費は早い

## 設備強化対策で今後設置を計画している設備の効果

添付 4-1 に示す設備強化対策のうち、外部電源喪失事象や全交流電源喪失事象に対して効果が期待できる以下の項目について、その効果を評価した。

### 1. 恒設非常用発電機の設置

外部電源喪失事象が発生した場合、非常用発電機が起動し、バックアップ電源として事象収束に必要な機器に電源を供給する。非常用発電機の燃料の枯渇等により非常用発電機が停止した場合には全交流電源喪失事象に至ることになる。

恒設非常用発電機は既設の2台の非常用発電機に加えてさらなるバックアップ電源として機能することから、外部電源喪失から全交流電源喪失に至るまでのバックアップ電源の継続時間が増えることになる。(対策の概要は(2/2)参照)

## 設備強化対策の概要 (非常用発電機の設置)

○原子力安全・保安院からの「非常用発電設備の保安規定上の取扱いについて(指示)」(H23. 4. 9発出)により、低温停止状態および燃料交換において、非常用発電設備が2台動作可能であることが要求されたことを受け、非常用発電設備を追設する。

2ユニットに1台設置する場合の例

